きのうのビギナーがあすのジャパン
部員増の中央大学

①
ディフェンスに囲まれながらも、シュートを放つ田口毅治選手（経済学部3年）

フランス語で杖を「ラ・クロス」というそうだ。ラクロスはおしゃれな印象からは程遠い苛烈なスポーツ。試合はボールを奪い合う接触プレーの連続で、クロスとクロスがしのぎを削る、シュートは時速160㎞にも達するという。日本代表チーム（22歳以下）に選手2人が選ばれた中央大学男子ラクロス部の今を追った。

融合スポーツ

ラインに沿って、中大選手が駆け上がる。8月20日、東京・目白の学習院大学で開幕した関東学生リーグ戦2部Bブロック、駒澤大戦。クロスのネットにはボールが入っている。ディフェンスがクロスを使い、縦に横

◎写真提供／日本ラクロス協会　◎写真撮影／①～③は日本ラクロス協会オフィシャルフォトグラファー　海藤秀満氏

男子ラクロス部

ボールを持って疾走する大牧功明選手（文学部2年）

に激しいブロックを仕掛けてくる。クロスとクロスがぶつかると金属音が弾ける。

中大は防御をかいくぐって味方へパス。アイスホッケーと同じくゴール裏からの攻撃も可能だから回り込んで、またしてもパス、そしてシュート。決まった。

幾つもの競技が浮かんできた。走る姿や接触プレーはサッカー、ラグビー、ハンドボール…。クロスを操るところはホッケーやアイスホッケー。頭上から投げおろすシュートは野球のピッチャーかテニスのサーブ、バドミントンのスマッシュだ。ヘルメット着用と長い距離のパス攻撃からはアメリカンフットボールを連想させる。

「ラクロスは融合スポーツです」。サイドライン近くで応援していた4年生部員の小川祐輔さん（経済学部）がひとことで言い当てた。

テレビ中継はあまりないから、なじみが薄いように思われるが、中大男子ラクロス部員は年々増えている。小川さんの入学時、20人ほどだったのが今は50人を超える。競技を始めるとその魅力にはまってしまうのだ。

チーム練習は午前で終わり

ク詳しい人はあまりいない。ラクロスは大学から始める人が多く、それでいて努力次第では日本代表になれる。

きのうのビギナーがあすのジャパン

部員増の中央大学男子ラクロス部

左から中澤選手、高田主将、小澤選手

中大のエース、中澤寛さん（文学部4年）と小澤徹也さん（商学部3年）の2人は、22歳以下（U22）が参加する国際大会「第6回アジア・パシフィック選手権」（中国、6月）に選ばれ、日本の優勝に貢献した。

オーストラリアとの決勝では2人がともに2得点を挙げる大活躍だった。中大は大学リーグの2部所属ながら、実力次第で日本代表になる。

中澤さんは中大附属高時代、野球部だった。打順は1番、守備位置は右翼。169㎝、71㎏。俊足。イチロー選手（ヤンキース）を思わせる。「大学でも野球部に入ろうと思っていました」。新入生勧誘で、それが劇的に変わった。「ラクロス部は日本代表、日の丸を付けてプレーできるとアピールしてきて、僕もやる以上は目立ちたいし、誇れるものが欲しかった」。3年生にU22日本代表選手がいた。2011年のアジア・パシフィック選手権（ニュージーランド、7月）の日本代表メンバーに入った遠藤竜郎選手だ。中澤さんの、目標にまっしぐらの日々が始まった。

小澤さんも中大附高出身。野球部の先輩の中澤さんに勧誘された。「アメリカンフットボール部に興味がありましたが、アメフトは高校時代からの経験者が多いと聞いて、ラクロスならば横一線のスタート。日本代表になりたかった」

アメフトからの転向は高田博太主将（経済学部4年）だ。都立西高の出身。西高はアメフトの強豪で、しかも高田選手は目立つポジションのWR。「ぶつかりあうスポーツが好きです。ラクロスはアメフトと同じで、新しいスポーツにも魅力を感じました。練習が午前中で終わって、ゼミやアルバイトなど、ほかの学生生活に時間を使えるのもよかった」

未公認部会の意地

□労苦がある。1989年に創部して、いまだ体育連盟に公認されていない。週5日午前中（7～10時）に行う練習場の確保が大変で、多摩市の公共施設を複数カ所、借りている。この利用料が昨年12月に改定され、部の運営費に響く。大学のラグビー場（多摩キャンパス）を借りられるようになったのはつい最近だ。

中澤選手は日ごろの練習でもチームの中心となって、下級生にアドバイスを送る。大学から始めたスポーツ。キャリアが浅いということは、乾いたスポンジに水がスーッと浸みていく利点もある。

「小澤、中澤両代表選手2人の言うことは説得力があります」とは高田主将。中澤選手が2年先輩の日本代表選手を目指したように、追いつけ追い越せのムードが出てくる。

午前中のチーム練習を終えた選手が夕刻、自主的に集まる場所がある。多摩都市モノレールの車窓から見える大学近くの公園。ここに壁打ちができるスペースがある。練習熱心で知られた先輩の名をとって「辻公園」と呼ばれるようになった。その先輩は一部上場企業に勤務、現在はインド駐在員として活躍中だ。

一方の壁に向かって、クロスからボールを繰り出す。角度を変えたり、強弱をつけたり、自分なりに試合を

中大での練習風景

あすのジャパンを目指し、きょうも壁打ちは続く

◎写真提供／日本ラクロス協会　◎写真撮影／①～③は日本ラクロス協会オフィシャルフォトグラファー　海藤秀満氏

③

ハイタッチ、チーム一体感のシンボルでもある

想定して工夫する。下級生がここで技を磨き、レギュラーを目指す。レギュラーはポジションを確保するのに汗を流す。辻公園が栄光への道の出発点。

力をつけた自分たちを見てほしい。思いはチラシ配りにも表れる。夏休み中の8月1～2日、多摩キャンパスで秋季リーグ戦日程を広報した。選手はそろいのTシャツを着て、ペデストリアンデッキ（遊歩道）を歩く学生に声をかける。運動選手は汗臭いといわれるが、ラクロス部員はシャワーを浴び、髪も整えて清潔感を出していた。

応援のためなら

スーツを着た先輩OBが試合会場にやってきた。リーグ戦開幕戦は午後5時10分開始。試合に間に合わせるため、この日は朝5時から仕事をしたという。ラクロスには、自分をそうさせる魅力がある。

グラウンドで日本代表の小澤選手が激しいディフェンスに遭っている。彼を抑えなければ相手校に勝機はない。代表選手が活躍すれば、中大は

きのうのビギナーがあすのジャパン

部員増の中央大学男子ラクロス部

そろいのTシャツを着て、応援する部員たち

開幕戦の対駒大（下の2枚も同カード）

チャンスだ。小澤・中澤の代表コンビに田口毅治（経済学部3年）、高田選手らが続く。

サイドライン近くでは、他大学部員らが中大の誇る日本代表選手2人の動きを凝視して、克明に記録に残す。中大チームも他校の情報を集めて戦略を練る。勝利を得るため、女子マネジャー、応援チームを含めた総力戦だ。

秋季リーグは無敗の東京学芸大を14－5で下して、3勝1分け、首位をひた走る。最終戦の横浜国立大（10月20日）にも勝って、Bブロックを1位で通過し、入れ替え戦（10月下旬～11月上旬予定、部のHP掲載）へ。1部昇格が見えてきた。

辻公園からは、いまも壁打ちの音が聞こえる。きのうのビギナーが、あすのジャパンになるラクロス。

中大選手は、夢を追いかけ、きょうもクロスを握っている。

中大のリーグ戦現状

関東学生リーグ2部リーグBブロックに所属。青山学院、駒澤、東京学芸、横浜国立、大東文化と戦う。☆1部リーグAブロックには慶應、早稲田、日本体育、明治、東京理科、成蹊が名を連ねている。☆2部リーグ上位2チームが、1部下位2チームと入れ替え戦を行う。中大は1部昇格を目指す。

競技説明

男女で異なる部分もあるが、男子はサッカーと同程度のグラウンドに1チーム10人で対戦する。試合時間の基本は80分。20分をクオーター（Q）と呼び、4Qまで続ける。出場選手は交代が何度でも可能。運動量が激しいポジションは2～3分を目処に交代し、いい動きを展開する。

ラクロスの魅力～カメラマンの目～

日本の大学生がラクロスを始めて四半世紀が過ぎた。

ラクロスは、スポーツにはあまり縁がなさそうな女子大や国立大でも活発なのが特徴だ。たいがいのプレーヤーが大学からラクロスを始め、熱意ある人は卒業後もクラブチームに属して競技を続ける。

日本のラクロスで興味深い点は、各校のプレーヤーが一緒になって運営に携わっていることだ。大会での役割分担や進行台本の作成など、競技以外の様々な組織運営の方法やチームワークを学ぶ。そこに、社会の様々な分野で活躍するOB・OGの手助けも加わり、人脈も広がる。

文化としても興味深いラクロスだが、スポーツとしては撮りにくい種目だ。特に男子はスピードも早く、独特の用具や小さなボールを瞬時に画面に収めるのは難しい。最新のオートフォーカス技術を搭載したカメラでも、なかなか納得する1枚は決まらない。それゆえに日々挑戦が続く。

海藤秀満